

『原爆文学研究』投稿規定

一、原爆文学研究会の機関誌として会員からの意欲的な投稿を歓迎します。会員以外の原稿掲載については編集委員会で判断します。

二、投稿に際しては、住所・電話番号を明記の上お送り下さい。原稿は返却いたしませんので、お手元に控えをお残し下さい。

三、パソコン等を使用の場合はプリントアウト原稿にデータファイルを添付の上お送り下さい。

四、原稿は、新字のあるものはなるべく新字を用い、注の形式等は既刊のものに準拠してください。

五、投稿者は各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき一〇〇〇円を発行経費として負担することをご了承ください。

『原爆文学研究』編集委員

岡村幸宣 加島正浩 川口隆行
楠田剛士（編集長） 坂口博 中野和典
長野秀樹 野坂昭雄 堀本嘉子 柳瀬善治
山本昭宏 李文茹

編集後記

二〇号をお届けします。本号は自由投稿論文、書評、詩のほかに、ワークシヨップと合評会にもとづく特集と、研究会発足二〇年を記念した特集を組みました。執筆者の皆様と、年度末の発行にご尽力いただいた花書院の皆様

様にお礼申し上げます。

本号の最終的な編集作業は二月下旬でした。冬季の北京五輪が終わり、まもなくパラリンピックが開かれるタイミングで、ロシア軍がウクライナに侵攻。一〇万人以上が避難。市民・兵士に多数の死傷者。プーチン大統領が核兵器の使用を示唆し、国際的な緊張が高まっているという状況です。ロシア軍によるチェルノブイリ原発の占拠は、事故後も原発が人類のリスクであり続けていることをまざまざと見せつけます。

ウクライナの民話に『てぶくろ』（福音館書店）という話があります。雪の森に片方だけ落ちていた手袋に、はじめにねずみが入って暮らしはじめ、続いてかえるが入り、うさぎが入り、きつねが入り……と住人が増えていきます。やがて捕食者のオオカミや大きな熊もやってきて同居します。一つの手袋にそんなに入るはずありませんが、ここには混沌とした国際社会において目指すべき共生社会が描かれているように思います。

本会も実に多くの方々に参加されてきました。大きな暴力に対して、人々が紡いできた物語の可能性を探ってきた二〇年だったと思います。『てぶくろ』の結末は手袋の落とし主がやってきて動物が逃げ出しますが、本会はそれと異なり、ここまでを第一期として区切り、第二期を開始する予定です。これまでの感謝を申し上げるとともに第二期への参加どうぞよろしく願います。（楠田剛士）

原爆文学研究

二〇二二年三月二一日発行

20

編集 原爆文学研究会

八四一〇六〇

福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部

中野和典研究室気付

発行

八〇〇〇三三

福岡市中央区白金二一九一

TEL 九三五四〇六七

FAX 九三五四四四二

定価 一、二〇〇円(本体一〇九二円)

◇書店にない場合は「地方小出版流通センター扱い」とご指定の上、書店にご注文下さい。

◇継続購読は、花書院「原爆文学研究係」にお申し込み下さい。送料は無料となります。